

『劉涓子鬼遺方』の鍼灸について

宮川 隆弘

日本鍼灸研究会

『劉涓子鬼遺方』は晋末の劉涓子が撰じ、後に齊の永元元年(499)に龔慶宣が再編して序文を附した外科書である。『隋書』経籍志に「劉涓子鬼遺方十卷。龔慶宣撰。」、『旧唐書』経籍志に「劉涓子南方十卷。龔慶宣撰。」、『唐書』芸文志に「龔慶宣劉涓子男方十卷」とある。現存する最古の版本は北京図書館所蔵の宋版の五卷本(人民衛生出版社1956年影印、『統修四庫全書』所収)であるが、これは宋の『崇文総目』に「劉涓子鬼遺方十卷。東蜀刺史李頤録」と著録されたものの一部と考えられる。一方、これとは別に『劉涓子治癰疽神仙遺論』と題する一本が現存する。これは古くは南宋の陳振孫『直齋書録解題』に「劉涓子神仙遺論十卷」と著録され、後に清の錢曾(1629-1701)の『述古堂蔵書目』に「劉涓子治癰疽神仙遺論一卷^抄」, 同著者の『讀書敏求記』の「劉涓子鬼遺方五卷」の条に「予別有劉涓子治癰疽神仙遺論一卷。與此同是宋鈔, 皆宜別録副本備之。」と記されたものであるが、最初に日本・江戸中期の宝暦七年(1757)刊行の『劉涓子鬼遺方』に附載されたテキストによって流布し、のちに陸心源(1834-1894)が『群書校補』巻二十五において旧鈔本「劉涓子治癰疽神仙遺論」を載録した。なお『劉涓子鬼遺方』の佚文は『肘后方』『千金方』『外台秘要方』『医心方』『太平聖恵方』『政和本草』などの宋以前の医書のほか、元の『外科正義』, 明の『証治準繩』などにも見える。清の『瘍医大全』にすら「鬼遺方云」といった引用は31箇所もある。これらのことから、『劉涓子鬼遺方』が後代の外科治療に対して、大きな影響を及ぼした事がわかる。

以下、宋刊本『劉涓子鬼遺方』ならびに『群書校補』本『劉涓子治癰疽神仙遺論』に見える鍼灸条文について考察する。

鍼灸関係の条文は、宋刊本『劉涓子鬼遺方』五巻には少なく、鍼法は巻一及び巻四に外科治療(排膿)の一環として、また灸法は巻四の「黄父一疽論」及び「相癰疽知是非可灸法」にみられるに過ぎない。なお後者は『太平聖恵方』巻六十一「弁癰疽宜灸不宜灸法」と内容が一致する。

『劉涓子治癰疽神仙遺論』では先ず「弁脛法」と題する章に五臓六腑の各脛穴名とその部位が載せられているが、厥陰脛の代わりに「心包絡脛」があり、かつ部位を「第七椎骨下」とする。また膈脛と肝脛はいずれも「第九椎骨下」とあって区別がない。さらに臓腑の脛穴にとどまらず、中脛脛と白環脛も追加されている。「決死生法」と題する章は癰疽の種類と出現部位及び予後について記述したものであるが、「針烙」「刺」という言葉を使って外科処置を指示している。また「針烙宜不宜」と題する章に書かれている外科的記述は、『太平聖恵方』や『聖濟総録』にも同様のものが見える。これら鍼の外科的用法条文のほか、若干の灸法条文も見受けられる。

『劉涓子鬼遺方』の鍼灸に関する佚文は『外台秘要方』や『医心方』, あるいは明の『証治準繩』瘍科・巻三などにも見える。

『劉涓子鬼遺方』の鍼灸条文は、宋刊本には記載が少ないが、佚文は種々の医書に見えることから、歴代の外科鍼灸に相当影響を及ぼしたものと考えられる。